

令和五年度 新宿区生涯学習フェスティバル

「短歌」 「俳句」 「川柳」

作品集

主催

公益財団法人新宿未来創造財団

共催

新宿区

【審査員】（五十音順）

【短歌】

『短歌人』元編集委員

紺野 裕子

「りとむ」短歌会 所属

樋口 智子

「かりん」編集委員

古谷 円

【俳句】

俳句雑誌「瓊玲」代表

今野 龍二

「沖」俳句会 同人副会長

栗原 公子

「花野」会員

島貫 恵

【川柳】

川柳研究社 副幹事長

芦田 鈴美

川柳きやり吟社 社人

長瀬 熙実

川柳人協会 相談役

米島 暁子

（敬称略）

作品中の括弧・漢字・かな遣い・送り仮名・
ふりがな・空白などの表記は、作者の意図を
尊重し、原文のまま掲載しています。

短

歌

区長賞

通院は遠回りになるバス路線義父ちちには好きな花の道あり

岡本 万寿子

特選

ぬか漬けの名人だったしずさんに何んて言おうか「私、孫です。」

岩見 京子

両手の「グー」ほっぺにあててアンパンマン吾子とデビューの手話サークルに 友部 美奈子

重ねてたマスク一枚放り投げコロナ五類で旅に出る夏 久保田 尚代

秀逸

皆既月食写真に収めまた一つ宝物増ふゆ赤銅の月

近藤 勝子

すぎゆきし春はるは幾いくたび粲さん粲さんと古木こぼくの桜さくら満開まんかいになる

栗田 三和子

朝日さす梅雨の合間の散歩道緑の中に子供らの声

下川 幸子

遠花火音だけ聞こゆ夜の闇四年の日々は何処と思ふ

飯島 弘子

戦争が終った年に1年生布のカバンの持ち手は木だった

岡 時子

デイサービスふるさと・和み

露天風呂注目浴びて鏡見る我に驚くマスクしたまま
 わが胸をよぎる男の多けれど寂しさの傷誰も癒せぬ
 高校の制服見て想うなり我が身にまとう白き服
 三年の月日に負けぬ仲だから人混みの中見つけた瞳
 母ポツリ「あなたを生んで良かった」と言葉を残し宇宙へ飛び立つ
 奥津城にひとり淋しく待つ父よ母と目見えん十七年ぶり
 新春のデイサービスに笑ひ声みなさんがゐる今を父をり
 受話器より溢れるように流れくる故郷の叔母の虹色の声
 一通の友の手紙に活性す外国めぐる旅への誘ひ
 温かなお湯のぬくもり優しかり友と来たりし湯河原の旅
 友よりの写真の葉書マンサクは旅に出ようと誘うがに見え
 弱者じやくしやとふ老いにも慣なれて譲ゆずらるる電車てんしゃの席せきに躊躇ためらはず座ざし
 待ち侘わびし会あう日果たしぬふるさとの友の温ユカネもり黄金コガネの如し
 音信のとだえし友を案じおり健やかなれと祈る思いで
 颯爽さつそうと十九の春を歩みゆく心やさしき君のまなざし

丸子 留佳

矢野 宣子

矢野 宣子

岡本 万寿子

小林 繁子

小林 繁子

岩見 京子

友部 美奈子

近藤 勝子

吉澤 満千子

吉澤 満千子

栗田 三和子

瓜生 紘子

瓜生 紘子

瓜生 英子

戸山短歌会

満開の桜並木に春嵐幹にはりつくいとし花びら

嫌な事すぐに消え去る小宇宙カフェのレジにて襲うさみしさ

葉桜に憤怒の相のひとかたまり花はかへらず今日もかへらず

断捨離であれもこれもと思いきる難しいのは人間関係

母の施設探し案ずる吾の未来夫は呆れて「まだ新婚ぞ」

餌探したまにはヤモリ食べようかそれとも蜂か雄カマキリか

怖い顔鋭い鎌と長い爪襲ってくるぞ雌のカマキリ

占いは参考決めるのは私模範解答なんか無いから

このたびの達成率は高くなる聞くと動機が不純めいてる

わたしでも舞台の上でキラキラとフラダンスするもつと若ければ

孫の声はやく来てよとうれしそう見つけて得意だんご虫だよ

くちなしの香ほのかに漂えり夕闇せまる雨後の露地裏

四年ぶり心ウキウキお囃子に孫の手引いて夜店をめぐる

夕暮れに穴からのぞくアブラゼミ子供の集う自然観察

夕日うけもみじ色づく山の道景色愛でつつ家路を急ぐ

瓜生 英子

戸山短歌会

中川 富子

中川 富子

生地 和美

戸山短歌会

生地 和美

戸山短歌会

小泉 博

戸山短歌会

小泉 博

戸山短歌会

矢川 浩子

矢川 浩子

河野 怜子

デイサービス ハミッツ

河野 怜子

デイサービス ハミッツ

向山 幸恵

デイサービス ハミッツ

志村 あけみ

デイサービス ハミッツ

伊藤 清和

デイサービス ハミッツ

伊藤 清和

デイサービス ハミッツ

紫陽花の青葉にきらりひとしづく雲間の陽射しに深呼吸

新緑の庭にたたずみ見上げれば小鳥がチチとさえずりかける

汗かいて回数増える洗濯もすつきり乾きお日様のおい

「君の名は」有楽町とは卒寿の私スマホの若者須賀男坂

呉服去りチエン店ぞろろ神楽坂和菓子うなぎ下駄残こせよ毘沙門

炎天下空に突き出す重機音寡黙な眼一途な動き

紅梅の香りに託す我が思い凍てつく夜越え君に届けと

気がかりは遠くの息子より近く道端でなくつがいの蛙

庭巡り筒灯滑らす先々で我を迎えるガマが三匹

世のあげる悲鳴の如き心地するニュース諸々我もお年か

戦時中俺は養子で小千谷市でわらぐつはいて学校通った

そのあとは埼玉巖に引越した電車を造る工場見てた

難しいこと考えてるからダメなんだアホで生きなきや私みたいに

喫茶店入らなかつたもつたいたいなどつか働くとこないかね

シマリスは警戒すると腹ばいになってシッポをふりふりするの

下川 幸子

デイサービス ハミッツ

松本 尚子

デイサービス ハミッツ

久保田 尚代

小林 昌仁

小林 昌仁

飯島 弘子

矢嶋 牧美

矢嶋 牧美

富永 直敏

富永 直敏

平田 修

デイサービスふるさと・和み

平田 修

デイサービスふるさと・和み

佐々木 理恵

デイサービスふるさと・和み

佐々木 理恵

デイサービスふるさと・和み

花井 葉子

デイサービスふるさと・和み

シマリスはかわいいけれどホントばか手からのぼって耳をかじるの
SMAPを追っかけ渡った赤信号警察官がピピピーッて
つらいこと悲しいことをお空まで持って行ってね七夕様
6粒の種からみかんの芽が出たのもらって育てて私の代わりに
押し車押ししてのぼって諏訪神社角を曲れば助川先生
包帯がやつととれたよ中指が曲がったままでも将棋に麻雀
現場から落ちて記憶がないけれど故郷はたぶん雪が降るとこ
夜勤あけ通院同行タクシーでもれなく寝落ち大目に見てや
ハヤヤッコ変な名前の競馬まさか来るとは思わなかった
うち飴屋金太郎飴むずかしい熱すぎてもね冷たすぎても
赤ちゃんを背負ってこねるの千歳飴すぐはしっこが太くなるのよ
団地暮らし隣の人がいなとき相馬盆歌うたってる
お盆だね親の写真はないけれど猫の写真はとつてあるのよ
あの金はさあてどこへ行ったやらくしやみをしたらわかるかもよ
この歌はまだ負けてない早い頃加藤はやぶさ戦闘隊

花井 葉子
デイサービスふるさと・和み
岡 時子
デイサービスふるさと・和み
小川 多美子
デイサービスふるさと・和み
小川 多美子
デイサービスふるさと・和み
小原 以智
デイサービスふるさと・和み
高田 一郎
デイサービスふるさと・和み
高田 一郎
デイサービスふるさと・和み
西山 誠一
デイサービスふるさと・和み
西山 誠一
デイサービスふるさと・和み
福田 政江
デイサービスふるさと・和み
福田 政江
デイサービスふるさと・和み
根本 キヨ
デイサービスふるさと・和み
根本 キヨ
デイサービスふるさと・和み
林 清二
デイサービスふるさと・和み
細井 武雄
デイサービスふるさと・和み

駆逐艦沈んだ理由はわからない調べる余裕なんてなかった
 しゃべりたいふだん誰ともしゃべらない笑いたいし体操したい
 補聴器をとってわかったことがある声が大きければいいってもんじやない
 弁当にたまご焼き入れ丸の内第一生命経理部だった
 いちじくは薬になるのなんだっけ何に効くのか忘れちゃった
 古い蚊帳新しい蚊帳ふたつある行李の中から出して使うの
 難しい道は主人と交代でトヨタでドライブ九州四国
 遊ぶものなかったからね戦時中歌ばかり歌ったりしました
 鉄とゴム戦争行ってなかったよ大八車で何でも運んだ
 まねき通り昔は店が四十軒うちは八百屋でとなりは肉屋
 芸者さん寄って来るようないい男ビルマで死んで母が泣いてた
 お風呂屋でそうじ番台働いたおなじみさんがおかずをくれた
 400gで私が生まれ妹が450gで生まれたの
 あの頃はケーブルカーはなかったの背負われのぼった箱根山
 学校の帰りにきゅうりとり胸に入れて泳いで食べるの

細井 武雄
 デイサービスふるさと・和み
 森田 美津江
 デイサービスふるさと・和み
 森田 美津江
 デイサービスふるさと・和み
 林 照子
 デイサービスふるさと・和み
 関井 房子
 デイサービスふるさと・和み
 関井 房子
 デイサービスふるさと・和み
 難波 恒子
 デイサービスふるさと・和み
 難波 恒子
 デイサービスふるさと・和み
 藤田 一雄
 デイサービスふるさと・和み
 藤田 一雄
 デイサービスふるさと・和み
 丹羽 良枝
 デイサービスふるさと・和み
 丹羽 良枝
 デイサービスふるさと・和み
 篠端 方子
 デイサービスふるさと・和み
 篠端 方子
 デイサービスふるさと・和み
 牛頭 裕子
 デイサービスふるさと・和み
 牛頭 裕子
 デイサービスふるさと・和み

百人じゃきかなかったわ病院の食事作りは四時起きで
たのしみは橘曙覧に倣わんと独楽吟を5万首詠むとき
80を過ぎ眠られぬ夜も多く佳き日探りて回想するとき
終戦日国に帰れず独身の伯父は戦死すシマンゲの地で
買い物は坂道ばかり負けないわ自転車ひいてゆつくり登る
サムライの話がしたい長嶋の自慢をしてた父と一緒に
黒い枝カラスが散らす花吹雪白い水玉模様の夕焼ゆやけ

牛頭 裕子
デイサーピスふるさと・和み

阿部 毅一郎

阿部 毅一郎

村田 多恵子

村田 多恵子

上原 美香

戸山短歌会

上原 美香

戸山短歌会

審査員選評

選評

紺野 裕子

『通院は遠回りになるバス路線ちち義父には好きな花の道あり』

通院する義父に付き添う作者だろうか。一首の作りが上手い。通院になぜ遠回りのバス路線を利用するのか。軽い疑問が下句で明らかに
なり、温かな波紋が胸に広がる。作者自身は黒子に徹した詠み方だ。

『ぬか漬けの名人だったしずさんに何んて言おうか「私、孫です。」』

祖母「しずさん」の丹精込めた糠床を母が守り、そして今作者が譲り受けたのだろうか。長い間に熟成した家庭の味。結句は亡き祖母へ
送る心からの挨拶だ。

『気がかりは遠くの息子より近く道端でなくつがいの蛙』

息子と道端の蛙を比べるというユーモラスで、しかし虚を衝かれた一首。比較出来ないものながら、今この瞬間は確かに無防備なつがいの
蛙を案じているのだ。

『戦争が終った年に1年生布のカバンの持ち手は木だった』

終戦時の一年生の持ったカバンがリアルに描かれた。なけなしの材料で作られた精一杯のカバン。抒情を排した表現が鮮明で、粗いデッ
サン画を見る思いだ。

『両手の「グー」ほっぺにあててアンパンマン吾子とデビューの手話サークルに』

手話の力は素晴らしい。上句のシンプルな手の動きは容易にアンパンマンを想像させる。嬉しい場面を捉えているので下句はもう少しスッ
キリしたい。

『断捨離であれもこれとも思いきる難しいのは人間関係』

ものを断捨離しつつ作者の思いは人間関係に及び手が止まったようだ。時をかけて築いた関係はさらに時に晒され、なだらかに消滅していくものなのだろうか。

『占いは参考決めるのは私模範解答なんか無いから』

「占いは参考…」と、ささやかな揺らぎを見せつつ上句は力強い。二句の句割れと三句の名詞止めが効果的。多様性の中で自己を確立しようとする試みが詠まれた。

『夕日うけもみじ色づく山の道景色愛でつつ家路を急ぐ』

夕日を受けたもみじは色が透き通って美しい。その紅葉にひととき目を遊ばせながら家路を急ぐ作者。一期一会を惜しむ心持ちが伝わる。

『赤ちゃんを背負ってこねるの千歳飴ちとせあめすぐはしっこが太くなるのよ』

千歳飴を作る人にしか分からない手元の微妙な加減が表現された。赤子を背負いながらする自営業の光景も見える。三句の「の」は無い方が良い。

選評

樋口 智子

『重ねてたマスク一枚放り投げコロナ五類で旅に出る夏』

今年の変化を端的に表現した一首。旅に出る解放感が「マスク一枚放り投げ」に表れている。

『すぎゆきし春は幾たびいくたび繁さんざんと古木こぼくの桜満開さくらまんかいになる』

目の前の花を愛でながら、立派な古木を前にして過去の春を幾重にも感じとっている。

『朝日さす梅雨の合間の散歩道緑の中に子供らの声』

久しぶりの晴れ間に元気な子供の声が聞こえてくる。「緑の中に」の把握が効いている。

『遠花火音だけ聞こゆ夜の闇四年の日々は何処と思ふ』

四年ぶりに聞こえてくる花火の音に、コロナ禍の時間の長さや意味に思いを巡らせている。

『通院は遠回りになるバス路線義父には好きな花の道あり』

義父の通院時のささやかな楽しみが伝わる。下の句が説明的になりすぎず良い。

『両手の「グー」ほっぺにあててアンパンマン吾子とデビューの手話サークルに』

上の句の具体的な描写が像を結ぶ。結句の「に」もさりげなく支えている。

『友よりの写真の葉書マンサクは旅に出ようと誘うが見え』

マンサクが旅に誘っているかに見えるという。そろそろ旅へという心の動きを捉える。

『くちなしの香ほのかに漂えり夕闇せまる雨後の露地裏』

雨上がりの少し蒸した夕ぐれに、くちなしはその白さと香りで浮き上がるよう。

『黒い枝カラスが散らす花吹雪白い水玉模様の夕焼』

初句、三句、結句と少し切れが多いが映像的でコマ送りのよう。モノクロの世界。

選評

古谷 円

『通院は遠回りになるバス路線義父には好きな花の道あり』

謎解きのような発見をした作者のまなざしも優しく、一首に凝縮されたドラマがたのしい。遠回りのバスにする理由が下句で明かされ、義父のこだわりも人柄も想像される。すつきりと整理された表現が巧みである。

『皆既月食写真に収めまた一つ宝物増ゆ赤銅の月』

宝物は赤銅の月を撮った一枚の写真。昨年十一月の天体ショーを胸をときめかせて見つめていた作者の心もしつかり収められた一首だ。はみでたような結句がかえって感動を伝える。

『ぬか漬けの名人だったしずさんに何んて言おうか「私、孫です。」』

弾んだ口調のなかに祖母への思慕があり、どんな邂逅が生まれるのかと想像をよぶ。「ぬか漬けの名人」「しずさん」から祖母の人物像が浮かんでくるところが素敵だ。

『両手の「グー」ほっぺにあててアンパンマン吾子とデビューの手話サークルに』

手話での「アンパンマン」のしぐさが見えてくるように表現し、口語の「ほっぺ」がやわらかい雰囲気を作っている。親子一緒の手話サークルの様子がおもわれ、ほほえましい。

『団地暮らし隣の人がいないとき相馬盆歌うたってる』

気を遣いながらうたう福島県相馬の夏の盆踊りの歌。声を張り上げてでなければ歌った気もしないのだ。作者の人生のドラマが思われ、「相馬盆歌」が光を放つ一首。

『現場から落ちて記憶がないけれど故郷はたぶん雪が降るとこ』

空白の記憶のなかにも、雪の匂いや手触りが残っているのだ。「たぶん」に詩が生まれる。物語性のある一首に人生が込められ、印象深い作品だった。

『弁当にたまご焼き入れ丸の内第一生命経理部だった』

丸の内づとめの思い出をさつと切り取って見せた一首には、若き日の一生懸命さや誇りがうかがわれる。「たまご焼き」「経理部」のリアルさに、毎日弁当を作って勤勉に働いた姿が見えてきそうだ。

『サムライの話がしたい長嶋の自慢をした父と一緒に』

野球日本代表の愛称「侍ジャパン」を略している。野球好きは父譲り。長嶋よりすごいと朗希や大谷の話をしたいのだ。野球をめぐる父と子の関係が思われ、父への懐かしさも伝わる

『赤ちゃんを背負ってこねるの千歳館すくはしっこが太くなるのよ』

作者は館屋さんのようだ。赤ちゃんを背負って奮闘している様子が浮かぶ。口語で赤ちゃんにも話しかけるようにまとめたところがたのしい。

俳

句

区長賞

大夕立過ぎて踏み出すハイヒール

野田 しげり
あをぎり俳句会

特選

ふらここに酔う青空が動くから

岡崎 久子
麦の会

疫病を退け紅をさす五月

衣川 洋子

妖しげな見世も賑はひ三の酉

荒井 司雄
あをぎり俳句会

秀逸

あぢさゐの登山鉄道濡れてゆく

岩見 京子

ラッパ飲みサイダー一本得意顔

太楽 登美子
「春耕」戸山句会

ただならぬこの世芒透く麦の波

竹下 潤子
麦の会

思い出も崩してゆくよかき氷

田中 朋子
麦の会

雨雲へ艶のほぐるる花菖蒲

堀江 明
あをぎり俳句会

応募作品一覧

けきよけきよにほーの待たるる初音かな

高辻 康治

高千穂の干しぜんまいや道の駅

島崎 民子
抒情歌を歌う会

昨日来た何処へ帰るかあきあかね

高辻 康治

通販で旬のめかぶ三つくる

島崎 民子
抒情歌を歌う会

トルソーの祈りの幻肢五月闇

小野 富美子
麦の会

ひるがへる葉うらの白さ風五月

衣川 洋子

人の名の不意に浮かべり新じゃがに芽

小野 富美子
麦の会

茗荷の子いつかまだかとのぞく朝

岩見 京子

夢殿の救世観音半夏雨

千田 真理子
麦の会

秋夕焼け小六スマホ塾の道

加瀬 誠一

青梅雨や魁夷の白馬ゆく湖畔

千田 真理子
麦の会

手をつなぐ黄帽赤帽花ふぶき

溝上 正晴
神楽坂陶芸倶楽部

見るほどに知るほどに黙原爆忌

岡崎 久子
麦の会

花いかだ眺める亀の甲羅干し

溝上 正晴
神楽坂陶芸倶楽部

卒寿おば乗り切る力木芽雨

朝香 艶子
麦の会

白百合の香り居間より溢れけり

後藤 和久

いつか逝く声なき道や梅雨の月

朝香 艶子
麦の会

土固き都心の巣作り夏燕

後藤 和久

南瓜煮る義父が疎開の味と言ふ

岡本 万寿子

紋白と踏切り渡り風光る

友部 美奈子

笙の音の三日の空に溶けてゆく

岡本 万寿子

夏近し日影を捜す黒揚羽

友部 美奈子

蒲公英や来世は風にまかせけり

爪を切る音かろやかに梅雨明くる

地蔵様しずかに見つめ夏越の輪

左から右聞き流す心太

紫陽花にスパンコールのごとき雨

夕焼を消して点灯スカイツリー

英女王に素足を乞いし京都御所

一木いちぼくより生あれる観音山笑かんのんやまわらう

七月の類想という迷路ゆく

菜の花の果ては高舞ふ潮煙

抽出に書きさしの文卒業す

息ひそめ理科室に視るほたるかな

染み透る五月の空へ木遣歌

近藤 勝子

沙羅の会

近藤 勝子

沙羅の会

太楽 登美子

「春耕」戸山句会

笹木 弘

麦の会

笹木 弘

麦の会

五十里 順三

麦の会

五十里 順三

麦の会

竹下 潤子

麦の会

田中 朋子

麦の会

堀江 明

あをぎり俳句会

荒井 司雄

あをぎり俳句会

峯岸 誠

あをぎり俳句会

峯岸 誠

あをぎり俳句会

葱坊主号令かけてみたくなる

風紋や浜昼顔の淡き紅

早朝の太鼓の一打祭り来る

五月闇マティスの赤き部屋にをり

引鶴二羽声さよならと思ひしに

つゆ空にでるためいきですいか食べ

せまい池おもいでおおいがまの穂が

糸遊いとゆうや消ゆる先にもある未来

家族には内緒で食べるひつまぶし

夏くればふるさとの梅思い出す

掬えずに金魚を救う夏祭り

紫陽花が梅雨を彩る凜として

洪柿はカラスも食わず落ちるのみ

野田 しげり

あをぎり俳句会

飯島 弘子

あをぎり俳句会

飯島 弘子

あをぎり俳句会

中川 富子

中川 富子

宮川 幸子

宮川 幸子

矢川 浩子

矢川 浩子

河野 怜子

デイサーピス ハミッツ

向山 幸恵

デイサーピス ハミッツ

向山 幸恵

デイサーピス ハミッツ

志村 あけみ

デイサーピス ハミッツ

すみれ草可憐に咲ける道の端

志村 あけみ
デイサービス ハミッツ

ビール飲むつまみは枝豆あうまし

久保田 尚代

葉ざくらを揺らして過ぎる風すずし

伊藤 清和
デイサービス ハミッツ

七夕に願いをこめて天仰ぐ

鈴木 啓正

葉桜をめぐる心にゆとりあり

伊藤 清和
デイサービス ハミッツ

雪かきの脇を仔犬がかけまわる

鈴木 啓正

暑い夏床ゆかを水拭き涼をとる

下川 幸子
デイサービス ハミッツ

箱庭はこにわやギョロ目はつたと新宿じゅくのガマ

富永 直敏

五月雨むらへに童わらべにぎやか我はうつ

西村 久美子
デイサービス ハミッツ

檮萌けやもえ尾おツン尾おツンと連れカラス

富永 直敏

おさなき日こいのぼり思うわれも又

西村 久美子
デイサービス ハミッツ

風光る頭をふればカチャカチャカチャ

佐々木 理恵
デイサービスふるさと・和み

初鯉食して季節感じいる

針谷 たか子
デイサービス ハミッツ

昼寝ひるねしない歩き回つてるそこらじゅう

佐々木 理恵
デイサービスふるさと・和み

目にしみる青葉若葉の季節かな

針谷 たか子
デイサービス ハミッツ

長月ながつきや決算日には大変よ

花井 葉子
デイサービスふるさと・和み

鯉のぼり元気ないのか垂れ下がり

青木 孝子
デイサービス ハミッツ

落ち葉掃き今日やつとけば明日あしたらく楽

岡 時子
デイサービスふるさと・和み

窓開けて下に見えるは鯉のぼり

松江 佐市
デイサービス ハミッツ

肩凝りかたこは落ち葉をはいて治すのよ

岡 時子
デイサービスふるさと・和み

停電や新宿なれど天の川

中島 徒雁

雨戸あけ庭の野花におはようさん

小川 多美子
デイサービスふるさと・和み

角筈や浴衣姿の都電客

中島 徒雁

田植えしてわき水のんでまた田植え

小原 以智
デイサービスふるさと・和み

夜明け前聞こえぬ蟬の声探す

久保田 尚代

赤いたすきドンドンパンパン盆踊り

小原 以智
デイサービスふるさと・和み

冷しあめ売つてますよ自販機で

体重は土用の丑に出てくるよ

夏の空風呂入るのは死ぬときだ

紺と白のモンペをはいて盆踊り

打ち水はひしやくできゅつと夕暮れに

涼し気な長い間の秋がいい

タイサンボク花がこんなに大きいの

山おろしオートレースのだいごみだ

競輪の試験に落ちてまた大工

春めいてお風呂で足がよくあがる

風光るまさくんおはよう行ってきます

味噌汁に玉ねぎ入れても美味しいよ

東京は何も入れずに塩雑炊

西山 誠一

林 清二

林 清二

林 照子

林 照子

近藤 ケイ子

近藤 ケイ子

市原 富夫

市原 富夫

石井 キミ子

石井 キミ子

関井 房子

関井 房子

ちつちやくてなんともいえないかたつむり

夏の空おれはどこでも行くから

紫の陽の花と呼ばれ誇らしげ

極暑にも救いの手あり蝉しぐれ

箱根山桜吹雪に星月夜

おそろいの白い帽子風は夏

上向きの乳房さながら山の染む

一突きに過去の巡るや心太

野村 長嗣

太田 作男

篠端 方子

篠端 方子

村田 多恵子

村田 多恵子

阿部 毅一郎

阿部 毅一郎

審査員選評

選評

今野 龍二

『ふらここに酔う青空が動くから』

ふらここはぶらんこのこと半仙戯ともいう。半分仙人になったようないい気分になることからこのように言われる。ふらここを思い切り漕げば青空が近づいたり遠のいたりする。これを動くはずのない青空が動くからと表現した。春の長閑な昼下がり、まさに羽化登仙の心地よい酔いの中にいる。

『ラッパ飲みサイダー一本得意顔』

炭酸飲料の一本はけっこうな量がある。コーラの一本は200ccくらいだがサイダーは300ccもある。ゆっくり飲んだのなら得意顔にはならない、おそらく一気飲みしたのであろう。サイダーの水分と炭酸の気体が口の中喉の奥で爆発しはじめるのだから物理的になかなか困難な仕事だ。子供には無理なことであろう。おとなでもこれをできる人はなかなかいない。得意顔になるはずだ。毎日が沸騰し始めたこの夏このような事は誰もががしたくなる。

『大夕立過ぎて踏み出すハイヒール』

いつもの夏ならばよく見かける光景だが、今年の東京は夕立が来ない。関東平野の北の方では毎日のように雷雨。汚れた東京を洗い流すような驟雨が欲しいところだがこれも異常気象のせい。突然の大夕立に足止めを食った妙齢、洗い流されてきれいになった街にあらためてその一步を踏み出すところ。ハイヒールがいい、別な種類の靴では句にならない。

『妖しげな見世も賑はひ三の酉』

新宿は花園神社のお酉様、中でも三の酉は格別の賑わいである。芸能の神様でもあるこの神社は芸能人の参拝者も多い。因みに熊手の粹な買い手がある。安い熊手も値切ってみる、値切りに応じたらその分をご祝儀として渡す、すると安い熊手でもシャシャシャンの手締めを

やってくれる。露店も香具師のものだから妖しい見世中にもある。かつて唐十郎の赤テントがあつて一種独特の雰囲気をも境内に醸し出してた。磨赤見みたいな怖くて妖しい人物がいまもいそうな気がしてならない。

『手をつなぐ黄帽赤帽花ふぶき』

幼稚園児のお花見の一齣、景が目に浮かぶかわいいですね。

『ひるがへる葉うらの白さ風五月』

新緑のまぶしい季節。風が葉裏を見せた表の鮮やかな緑に対して葉裏はやけに白っぽい。表裏の対比に気が付いた作者。

『競輪の試験に落ちてまた大工』

競輪選手を志しているのでしょうか。今年も失敗、足で稼ぐ競輪選手も手で稼ぐ大工さんも立派な仕事。この句、季語がないなどと言わない方がいい。無理に季語を入れようなどと思うとこの句の良さが無くなってしまふ。

『肩凝りは落ち葉をはいて治すのよ』

肩凝りは運動不足のせい、落葉をはいて治しましょう。

『葱坊主号令かけてみたくなる』

坊主頭のやんちゃ坊主がならんでいる、号令もかけてみたくなるのも然り。

選評

栗原 公子

『疫病を退け紅をさす五月』

時は風薫る五月。コロナはやつとインフルエンザ並の第五類という病気扱いになりました。三年もの長い間マスクを外せない息苦しい毎日でした。コロナ禍から解放された嬉しさが久し振りに口紅を差すという女性らしい仕草に表れています。このままコロナが収まってくれることを祈るばかりです。

俳句

『見るほどに知るほどに黙原爆忌』

原爆忌は昭和二十年八月六日に広島・九日に長崎に原子爆弾が投下された日で、犠牲者の御霊を鎮め同じ過ちを繰り返さない事を誓う日です。戦争や原爆のことを知れば知るほど悲惨さに声も出ません。未だに止まらない戦争が続いていることも悲しい現実です。

『ただならぬこの世芒透く麦の波』

麦の穂が実り黄色く豊かな麦畑。毎年の豊穡な景色であるのに、今年は何やら心が落ち着きません。梅雨明け前からの猛暑や山が崩れるほどの豪雨。完全には終わらないコロナ。遠い国の戦争のニュース。平穏な日々を祈りながら私達に何が出来るのでしょうか。

『あぢさゐの登山鉄道濡れてゆく』

箱根の登山鉄道の沿線に咲く紫陽花は有名で花の時期は紫陽花電車として大人気です。窓から触れんばかりに咲く紫陽花を愛でながらスイッチバックで登って行く登山鉄道。いつもなら憂鬱な雨の旅も紫陽花の季節ならばこそその旅の一興と言えるでしょう。

『地藏様しずかに見つめ夏越の輪』

夏越の輪というのは毎年六月三十日に行われる「夏越の祓」に神社に設えられた「茅の輪」を潜ることで今年前半の無事を感謝し穢れを落とし、残りの後半の無病息災を願う神事です。茅の輪くぐりをする善男善女をお地藏さまが見守ってくださっているようです。

『一本より生れる観音山笑う』

旅をしながらその土地で手に入る木に素材で力強い観音様を彫り続けた円空を思いだす一句です。どんな木も端にも仏様を見出して生涯に十二万體もの仏像を彫られたとの事。春の山が一本の木から生まれた観音様を優しく見守っているかのようです。

『抽出に書きさしの文卒業す』

あらあら残念な卒業でしたこと。密かに恋焦がれていた人へのラブレターを書いていたのに遂に完成させて手渡す勇気が無いままに卒業の日を迎えてしまったのでしょうか。何年も経って大人になれば、かえって若き日の美しい思い出となることでしょうか。

『青梅雨や魁夷の白馬ゆく湖畔』

青梅雨とは青葉若葉に降り続く雨のことです。作者が湖畔を散歩していると美しい白い馬を見かけたのかしら。まるで東山魁夷の絵画を抜け出してきたような白馬。魁夷の絵画のブルーの美しさは有名で、青梅雨の季語に良く合っていますね。

『けきよけきよにほーの待たるる初音かな』

早春に鶯が囀り始めます。ケキヨケキヨと拙い鳴き声も嬉しいものです。春告げ鳥の異名もある鶯も鳴き続けることで春が闊けてくる頃には上手に鳴けるようになるのでしょう。まさに継続は力ですね。ホーホケキヨと聞こえる春を楽しみに待つ作者です。

選評

島貫 恵

『大夕立過ぎて踏み出すハイヒール』

目の前が見えなくなるほどの大夕立、短時間で通り過ぎるが、その間にさまざまな思いが巡る。何かをリフレッシュしてまた一步踏み出すハイヒールに共鳴しました。

『ひるがへる葉うらの白さ風五月』

風に翻った葉の裏が「白い」と感じたその一瞬を逃さずに切り取り一句にした。五月は希望の月。生き生きとした詠みぶりに清潔感があり、いかにも五月の風が感じられる。

『思い出も崩してゆくよかき氷』

遠い日の恋の思い出か、それとも家族と過ごした思い出だろうか。誰もが感じるであろうことを「かき氷」の季語でさらりと書いて好感が持てた。詩的感受性の光る句。

『雨雲へ艶のほぐるる花菖蒲』

中七の「艶のほぐるる」の把握がとてもよい表現。今にも雨が降りそうな空へ弛んでいる菖蒲の花びらの様子が見えてくる。

『トルソーの祈りの幻肢五月闇』

五月闇は梅雨の暗闇で、昼間も厚い雲に覆われた暗さをいう。幻肢から祈りを想起した作者。五月闇がその心情を深くしている。

『青梅雨や魁夷の白馬ゆく湖畔』

東山魁夷の代表作の青い絵が目には浮かぶ。絵の中の白馬が現実にはスリッパして湖畔を歩いているようだ。「白馬ゆく」と言い切ったところがそう思わせて、青梅雨も効いている。

『菜の花の果ては高舞ふ潮煙』

菜の花の黄と海の青のコントラストに勢いがある。房総あたりの景だろうか。飛沫が「高舞う」ときっちり写生して出来ている句。

『妖しげな見世も賑はひ三の酉』

三の酉ともなると、いよいよ年の瀬の賑わいも深まる。「妖しげな見世」と、良い所に着目して三の酉の情趣を伝えている。

『染み透る五月の空へ木遣歌』

威勢のよい木遣歌が聞こえて来るよう。「染み透る」と先に言ったことで感動が深く伝わる。五月の空の美しさが句を支えている。

川

柳

区長賞

褒められて不思議な力湧いてくる

矢川 浩子

特選

花が好き水やりが好き家事が好き

森田 美津江
デイスリーブスふるさと・和み

七十の壁踏み台にジャンプする

友部 美奈子

孫の笑み疲れた心の栄養剤

志村 あけみ
デイスリーブス ハミッツ

秀逸

日本から四季が消えてく温暖化

川島 純夫
北新川柳会

お互いを認めて生きる多様性

飯島 弘子

いい血圧これじゃまだまだ死なないね

小川 多美子
デイスリーブスふるさと・和み

よくしゃべる人のだんなはしゃべらない

根本 キヨ
デイスリーブスふるさと・和み

食卓の彩り変えた物価高

中川 富子

応募作品一覧

マイナンバー使いこなせぬマイヘッド頭

大竹 弘子
百三喜楽会

高齢者ふえる薬と診察券

鶴殿 喜久子

外国の観光客が日本通

大竹 弘子
百三喜楽会

長生きしコロナの三年とり返す

友部 美奈子

仕事中スマホの中の我が子見る

丸子 留佳

知ってます新宿生まれとうがらし

難波 秀雄
北新川柳会

ガンバルゾ働いて得る爽快感え

小澤 美穂子

多様性新宿語るキーワード

難波 秀雄
北新川柳会

緑多く紅葉もみじ楽しむ大都会

小澤 美穂子

白い指丸めにつこりゴーサイン

菅佐原 道夫
北新川柳会

歳時記は芭蕉一茶の拾い読み

高辻 康治

AIに人間どんどん追い越され

菅佐原 道夫
北新川柳会

分かち合う旨さ美味しさ倍加する

高辻 康治

核持てどやたら使えぬことを知る

川島 純夫
北新川柳会

朝イチはチャージしとこうバスのなか

岩見 京子

大手術終えて復帰の師に感喜

小山 一湖
北新川柳会

百年の銭湯じきに改修す

岩見 京子

花束を供え合掌事故現場

小山 一湖
北新川柳会

考えることも丸投げ近未来

加瀬 誠一

みんなの声に不思議な安堵感

中川 富子

ガスレンジこれが最後と買い換かえる

鶴殿 喜久子

しがらみを解かれ満喫する孤高

矢川 浩子

嘘うそを足たしフエイクをフエイクらしくする

山野 杉太
麦あの会

熱中症予防に麦茶ちよびちよびと

久保田 尚代

助すけつ人にされて小切手こぎってにサイン

山野 杉太
麦あの会

地球の眼深き悲しみあの滂沱

飯島 弘子

長き道月に守られ富士登山

伊藤 清和
デイサービス ハミッツ

詰まらぬよう何度も流す節水トイレ

川本 淳子

寒き夜は犬のぬくもりなつかしき

松本 尚子
デイサービス ハミッツ

マイナンバーくふう工夫せんかー内閣府ないかくふー

富永 直敏

ティータイムバラの香りに微笑みぬ

松本 尚子
デイサービス ハミッツ

今のうち帰るわ雨がやんだから

村上 大
デイサービスふるさと・和み

ペランダの我が目をさますくさばな

古賀 眞左子
デイサービス ハミッツ

中華丼それなら食べて行こうかな

村上 大
デイサービスふるさと・和み

健康が蘇るなりあと一步

城野 潤子
デイサービス ハミッツ

じょうぶなの問題なのはこの頭

佐々木 理恵
デイサービスふるさと・和み

ハミッツに来れたおかげで若くなり

城野 潤子
デイサービス ハミッツ

チョン子って名前のシマリス飼ってたの

花井 葉子
デイサービスふるさと・和み

ピアノスト指動かずにごまかして

小尾 訓三
デイサービス ハミッツ

朝起きて食べたのかなあ歯がないの

岡 時子
デイサービスふるさと・和み

頑張ろう今日もその気が邪魔となり

小尾 訓三
デイサービス ハミッツ

脳トレは女性セブンのまちがい探し

岡 時子
デイサービスふるさと・和み

涼もとめついでつがれて友痛風

溝上 正晴
神楽坂陶芸倶楽部

手術した足持ちあげて浴槽に

小川 多美子
デイサービスふるさと・和み

窯出してほれほれ自作秋陶芸

溝上 正晴
神楽坂陶芸倶楽部

ちよこりんと座ってご飯まってるの

小原 以智
デイサービスふるさと・和み

ほうれい線マスクと加齢で深くなり

久保田 尚代

ペランダにからすが巣作りおっとばす

小原 以智
デイサービスふるさと・和み

楽しみは氷川神社の畑仕事

高田 一郎
デイスアービスふるさと・和み

富士山が見えるの団地のトイレから

福田 政江
デイスアービスふるさと・和み

越してきて夢中で富士山見てたけど

福田 政江
デイスアービスふるさと・和み

私よりおしゃべりな人いるんだね

根本 キヨ
デイスアービスふるさと・和み

浅草の松屋は東武の始発駅

細井 武雄
デイスアービスふるさと・和み

下っ端の俺の経費も百万円

細井 武雄
デイスアービスふるさと・和み

黒猫のシッポ追いかけて花畑

近藤 ケイ子
デイスアービスふるさと・和み

鉄くずを拾いに行つたいすみ川

市原 富夫
デイスアービスふるさと・和み

竹やりで勝てるわけねえ飛び道具

市原 富夫
デイスアービスふるさと・和み

がんばって生きているのよカタツムリ

石井 キミ子
デイスアービスふるさと・和み

武田でも小林製薬入社して

石井 キミ子
デイスアービスふるさと・和み

玄関を入ると猫があーと鳴く

難波 恒子
デイスアービスふるさと・和み

ピアノ好き姉の私はのんびり屋

難波 恒子
デイスアービスふるさと・和み

ろくなもの食べずに生きてじょうぶだよ

藤田 一雄
デイスアービスふるさと・和み

武蔵野館もらった券でグレン・ミラー

藤田 一雄
デイスアービスふるさと・和み

おはなちゃんきれいにさいたこんにちは

丹羽 良枝
デイスアービスふるさと・和み

風呂あがりおなががすいた手伝うよ

丹羽 良枝
デイスアービスふるさと・和み

みんな元氣おれが一番元氣ハハツ

野村 長嗣
デイスアービスふるさと・和み

赤信号まだだまだだほら青だ

太田 作男
デイスアービスふるさと・和み

どんぶりでふたごのプリンを作つたの

牛頭 裕子
デイスアービスふるさと・和み

爪切らないマニキュアぬるのばしてる

牛頭 裕子
デイスアービスふるさと・和み

つい誉めて三日も続^{みっか}く同じ皿

船山 伸夫

手に馴染む湯呑みで乾杯後半戦

船山 伸夫

手際良さ見せぬ手際の手際良さ

阿部 毅一郎

底抜けに底の抜けたる粗忽者

阿部 毅一郎

折鶴とAIに託す世界平和

村田 多恵子

今でしよう食品ロスを減らそうよ

村田 多恵子

審査員選評

選評

芦田 鈴美

『褒められて不思議な力湧いてくる』

褒められるとドーパミンが放出され幸福感に包まれると言われます。不思議な力に繋がります。子供に限らず大人にも効果は大ですね。

『日本から四季が消えてく温暖化』

真夏日、大洪水等々日本が、地球が危ない！日本の四季にも赤信号の点滅が始まりました。

『七十の壁踏み台にジャンプする』

きっかけを掴む事が大切です。七十才万歳ですね。

『花が好き水やりが好き家事が好き』

好き好き好きのリズムの良さが光ります。穏やかな日常が見えてほっとします。

『しがらみを解かれ満喫する孤高』

さてこれからへ思いの高まる事でしょう。

『頑張ろう今日もその気が邪魔となり』

頑張れ！頑張ろう！元氣付けるはずの言葉が重荷になる事も多いものです。

『嘘を足しフェイクをフェイクらしくする』

工夫に工夫を凝らして作り上げたフェイクの完成度はいかがでしたか。

『食卓の彩り変えた物価高』

食料品の値上がりは主婦泣かせ。玉子料理にも一工夫。努力が強いられます。

『がんばって生きているのよカタツムリ』
多様性が求められる時代です。ゆっくりとマイペース。カタツムリの歩みに習うことも多いですね。

選評

長瀬 熙実

『褒められて不思議な力湧いてくる』

歳を取ればとるほど褒められることは少なくなります。たまに褒められるともっとやりたいと思います。本当に不思議です。

『お互いを認めて生きる多様性』

多種多様な仕事、生き方の時代です。認め合ってこそ生きやすい世の中になると思います。

『七十の壁踏み台にジャンプする』

老いの壁が立ちふさがります。何をするにもつい足踏みしてしまいます。前向きに生きなさいと背を押してくれています。

『花が好き水やりが好き家事が好き』

花が好きな方は沢山いらっしゃいます。水やり最後は家事が好きとはつきり言える方はそうはいらっしゃいません。素敵ですね。

『分かち合う旨さ美味しさ倍加する』

美味しいものも独りでは味気ないですね。半分こしたり兄弟で取り合ったり美味しいです。

『食卓の彩り変えた物価高』

彩も品数も変わります。せめて食品だけは値上げの無いように政治に期待します。

『嘘うそを足たしフェイクをフェイクらしくする』

インターネットやマスコミから流れてくるものをどこまで信用していいのか本当に困ります。

『考えることも丸投げ近未来』

今でもそうかもしれないですね。AIに頼りAIを信じる。AIも人間の作品ですが。

『核持てどやたら使えぬことを知る』

こんな風に思ってくればいいのですが。核のボタンに手を置いているような不気味さもあります。

選評

米島 暁子

川柳のはじまりは、前句付から独立した、十七音の短詩文芸です。川柳は人間であり、人を詠みます。自分のことを川柳にすると、説得力があり、読み手を引き付けます。多くの人の共感を得ます。

『孫の笑み疲れた心の栄養剤』

孫の笑みに優るものはありません。下五の栄養剤が、この句をすばらしい句にしています。

『褒められて不思議な力湧いてくる』

人間は、大人も、子供も、褒められると、うれしいのです。私は、叱るより褒めて子育てをしました。

『いい血圧これじゃまだ死なないね』

私も血圧で健康管理をしています。まだまだ大丈夫と自分を褒めています。

『よくしゃべる人のだんなはしゃべらない』

ユーモア句になりました。情景が見えるような楽しい作品になりました。

『ガスレンジこれが最後と買い換える』

ガスレンジは、あまり取り換えるものではありません。着目のいい句になりました。

『日本から四季が消えてく温暖化』

本当にその通りです。いつの間に、梅雨が終り、猛暑が長い日々です。花も狂い咲きをしています。この句は中七が利いています。

『マイナンバー工夫せんかー内閣府ー』

大臣も、もっと勉強してから、マイナンバーを、はじめてほしかったですね。

『花が好き水やりが好き家事が好き』

優しさが、この句に表現されています。好きが、三ヶ所入って強調しています。女性らしい句です。

『ろくなもの食わずに生きてじょうぶだよ』

ご自分をさらけ出して、健康であることを、自慢しています。リズムのいい句になりました。